



季節の

作業

十月



初秋の作業

寒冷地

1 ポンキンの収穫はじめ

秋の多汁飼料として、牛・馬・豚・鶏が非常に好食するポンキンは、九月中頃から収穫をはじめます。貯蔵力がないので、霜のくる前に全部収穫を終るよう計画を立て、喰わせきれない場合には豚・鶏用としてチョッパーで切りきざみ、糠藁等をまぶしてサイレーシにします。

乳牛へ給与する量は、一日一頭当り二〇〜三〇キログ。ピタミン豊富な多汁飼料ですから、ポンキンを喰わせはじめると乳量の増加が目立ちます。飽食されれば五〇キログ以上も喰いますが、下痢便になるほど与えても意味がありません。

2 デントコーンのサイロ詰込み

デントコーンサイレーシは冬期飼料の基礎となるものですから、上手に詰め込んで上質のサイレーシを作りましょう。上手に

3 トレンチサイロへの詰込み

詰込むということは、①収穫適期は黄熟期前（硬化期前）②霜のくる前に刈取る ③雨に当たらないで詰込む ④均等に踏みつけながら詰込む ⑤最後は十分に踏圧し、三、四日して落ち着いてから、莖やビニールカバーで覆い、空気が出入しないように土（石灰土が固化するので良い）で密閉する。以上の点に注意して、なるべく短日中に作業を終了し、畑にデントコーンの乾草などを残さないようにしたいものです。デントコーンの乾草は栄養価が低く好ましくありません。

4 放牧の切り上げ

塔型サイロのない場合、あるいは飼料の余った場合に、ビニールのトレンチサイロは簡易に使用できて便利です。ビニールの大きさはいろいろあり、詰込む際の注意事項は塔型サイロと大体同様ですが上からの重圧が少いので、更に、①短かく細断する ②周囲をよく踏込む ③最後はカマボコ型に盛り上げる 等に留意すべきです。

また、トレンチサイロはSMS剤（スターグリン）を使用し易く、特にビート、かぶの茎葉を貯蔵するのに適しております。但しSMS剤は使用量（四〜五%）を誤らないように、材料の大方の重量を計ることが大切です。そして、詰込み後四十日を経

てから蓋をあげ給与いたします。

牧草地への過放牧は、牧草の翌年の生育を衰えさせますから、放牧は十月中旬までで切り上げ、追肥を行い明春の繁茂にそなえましょう。牧草は晩秋に自ら枯れて葉の

養分を根に貯わえ、寒い冬を耐えて春の萌芽を待ちます。この時に葉を喰いつくされてしまつと、根に充分な栄養を蓄積できず、冬枯れたり、翌春の生育が衰えたりするわけです。

尿溜の尿は、冬を目前にして汲み出さなければ無駄になりますので、牧草地へせひ散布しましょう。

暖地

1 デントコーンのサイロ詰込み

サイレーシ用デントコーンの収穫適期は黄熟期前（硬化期前）で、この時期に最も栄養生産量が多く、またこの頃になると茎は含水量が少いから直ぐ詰めてよいものです。水分が多い（七五%以上）場合には半日くらい乾燥しますが、むしろ水分が多くて失敗することは稀で、乾し過ぎて水分不足のためカビを生やすことがあります。その他の注意事項は寒冷地を参照下さい。

2 稲間中播の裏作飼料作物の播種

落水後四、五日して足跡に水がたまらなくなつて播種しますが、稲刈前三〇〜三五日播きが普通です。一般に立毛中に溝切して排水を良くして播かなければ冠水で腐ることがあります。半湿田では畦立栽培跡の

畦型がよいものです。播種作物は紫雲英一・五〜三・〇キログ、コモンベッチ四〜五キログ、赤クロバー一・〇キログ（以上各単播一〇ア当）。または赤クロバー一・〇七キログノイタリアンライグラス一・五〜二・〇キログ、紫雲英二・〇キログノイタリアンライグラス二・〇キログの混播もよく生育し、栄養的に均衡のとれた飼料を生産でき、地力増強上にも非常に有効です。つまり、苧科草は根に寄生する根瘤菌が空中の窒素を固定して土中に与え、禾本科草はその豊富な根群を有機質として残します。

3 甘藷の早掘りあとの燕麦・コモンベッチの混播
甘藷の後作を有利にするために、甘藷を早掘（イモ・ツルの両面利用を考えて）します。そしてその後に燕麦・コモンベッチを播種しますと、一二月に刈取ることができ、飼料的に考慮すればこの方が得策です。

燕麦一・五〜二・〇キログノコモンベッチ三〜五キログが適播量です。土壌の肥沃度が普通であれば、窒素をひかえ目とし、一回刈取後追肥として施すのが良いものです。

4 牧草の播種

輪換畑への牧草播種、畦畔の草生改良、山野の草地改良等は秋早くに湿気を利用して早播きするのが大切です。但し台風の雨には充分注意しなければなりません。酸性地には石灰をまいて酸度を矯正し、施肥も必ず行い、苧科と禾本科を混播いたします。はじめてクロバーやルイサンを作る土壌には根瘤菌を忘れずに接種しましょう。（かねこ）

晩秋の作業

寒冷地

1 牧草地の手入

晩秋の作業の中で、非常に大切であるにもかかわらず、等閑視されているものに、牧草地の手入れがあります。牧草地は春だけでなく秋の手入れが大切で、翌年の草生に大きな影響をあたえます。わずかの労力、肥料等によつて、牧草の生産量(質量ともに)を二倍、三倍と増取できることが多々あります。

(イ) 刈取りは九月下旬、放牧は十月中旬までに遅くとも切り上げる。

(ロ) 不良雑草は種子がこぼれないうちに抜取り焼却する。

(ハ) 追肥(尿、人糞には磷酸加用のもの)を行う。

(ニ) 不良牧草地は耕起し、明春新播する。その他各地の条件によつて、それぞれ手

入れすべき点があります。追肥は今年の草勢をふり返つてみて、苜科草の割合が少なかつたら、磷酸、石灰を多めに施して、窒素をひかえめにし、逆にいね科草の割合が少なかつたと思われる場合には、窒素を多めに施用します。加里は何れの場合にも必要ですが、主体となる窒素や磷酸の約半量を用いるのが通例です。また、牧草地の新播(または追播)計画については他

2 根菜類の収穫と貯蔵

の機会にゆずりましょう。

六カ月にわたる長い冬を目前にして、冬期間の貴重なビタミソ源となる根菜類(カブ、ビート、ルタバガ)は適期に収穫し、上手に貯蔵し、計画的に給与されなければなりません。

強い霜が降る前に(十月下旬～十一月上旬)収穫し、葉部(トップ)を、つけ根から切り取り——甜菜程切り込む必要はないが、葉の呼吸作用を防ぐため、根部の上端から切る——まわりについている枯れ葉も取り去り、排水のよい場所に小積みにし、薬程や藁でおおい、土をかけて貯蔵します。

場所は牛舎から近い方が給与に便利で、小積みにする高さは六〇～八〇センチ。余り積み過ぎると、内部に熱をもち失敗することがあります。土を掛ける厚さは各地の寒さに従つて一五～三〇センチにしますが、一回に全部かけてしまはしないで、二～三回にわたつて行い、はじめは薄くかけ、寒さが酷くなるに従い厚くかけなおします。

貯蔵内部の温度が零度から二～三度、つまり凍るか凍らないかの境目くらいの温度に保つのが理想的です。そうすればカブは一月、ルタバガ、ビートは三～五月まで貯蔵できます。なおビートは品種によつて貯蔵力に差があり、パルレスやハープ・エローは一月シュガーマンゴールドは三月、ハイフレッドやマリエンリントは五月まで保てます。また、葉部は直ぐに給与してかまいませんが、エンシレーシにする場合は、一般に水分が多過ぎるので、玉蜀黍の乾燥や薬稈類と共に詰込み、水分の調節をします。

暖地

1 水田裏作用燕麥の播種

燕麥は湿害に比較的強いので、湿田のイネ間中播きにも適します。落水後三～五日目頃に一〇センチ九～一二センチバラ播きします。同時にコモンベッチを混播するものが、収量多く栄養価の高い飼料を得られます。コモンベッチの播種量は八～一〇センチイネ間期間は二〇日以上となつてもかまいませんが、イネ刈り後なるべく早く肥料を施して下さい。弱々しく思われる幼苗も施肥により見違える程々々としてきます。なお湿田では排水溝を掘り、簡単な整地を行います。

また、耕起広幅畦立栽培では、播種量は燕麥五～七センチ、コモンベッチ四～六センチくらいでよく、中播栽培に比し燕麥の生育が旺盛なので、窒素質肥料をひかえ、過石、塩加など磷酸や加里質肥料を多めに施すべきです。播種が遅くなつたら芽出播きが有利です。

2 九月播き燕麥、ライムギの一番刈り

十一月に給与する青刈飼料としては更に好適です。ベッチ混播のものは更に嗜好が良く、蛋白成分が高いので濃厚飼料の節減にもなります。地際から刈取ると、翌春の草生を悪くしますので、地上六～七センチを残

し、その上に堆厩肥を着せて霜害を防止しましょう。追肥は畜尿か溼汗がもつとも効き目がありますが、伸長新芽が緑化してからの方がよいようです。あまり遅くなつてからの刈取りは、寒害、霜害をうけやすく、好ましくありません。

3 紫雲英の手入れ

翌春繁茂する紫雲英のために、施肥、菌核病防除、雑草防止が必要で

す。施肥料は一〇センチ硫酸一五～二五センチ過石一八～二五センチ、塩加七～八センチまたは草木灰六〇センチ位を施用します。過石は半量だけ施し、早春に残りの半量を施しても結構です。

田圃に残存する菌核病の子器(キノコ)を撲滅するには、消石灰一〇センチ二五センチを一週間おきに三回、または三五センチを一〇日おきに二回散布いたします。消石灰のアルカリの力で子器をとがして撲滅し、菌核病による弊害を防止できます。

また、雑草のスズメノテッポウを撲滅するためには、石灰窒素一〇センチ一八～二〇センチを均一に散布します。なるべく稲刈直後のスズメノテッポウが軟弱な時に使用することが殺草効果があります。紫雲英は強いので心配ありません。

(かねこ)





十月中～十一月中

越冬野菜の手入れ

クキタチナ・四月菜・ホウレンソウ・秋播ネギ・ゴボウなど圃場でそのまま冬を越させるものは寒さのくるまでに十分肥培に努めることが大切で、密生している部分は間引き、雑草に埋もれてしまうことのないよう除草を早目に行なう。特に幼植物で冬を迎える、ゴボウなどは雪の降り始め頃と、春先頃の霜柱のために生育が阻害されやすいものなので、強い霜の降りる前に中耕を行なうか、軽く土寄せを行ない、またモミガラなどを根元に敷いてやるのも効果がある。

冬越しの困難なエンドウとか、洋種ホウレンソウなどを翌春雪どけ早々萌芽させ、生育を促す方法として根雪前に種子を播くことが積雪地帯で行なわれている。この場合播種時期が問題で、年内に発芽してくるようでは越冬率悪くなるから、土中で芽を切る程度の時期に播くことがコツとなる。年によつて根雪になる時期が異なるので、良く天候を見きわめた上で作業にとりかかればならない。

宿根野菜のうち早春から萌芽するニラなどはおそくとも十月の中頃頃までには肥料を施すようにし、アスパラガスやウドは十一月に入つて生育が停止したら地上部を刈取つて軽く土寄せを行なう。

葉根菜類の収穫貯蔵

ハクサイ、ネギ、ダイコン、カブなどは、軽い霜に一～二度当たつても傷まないもの

であるが、強い霜の降りる前に漸次収穫を始める。収穫に当たつてはなるべく暖かい晴天の日を選んで行なう方が良く、生育さえ進んでおればなるべく秋末にならないうち収穫を始める。

収穫後直ぐ販売するとか、利用する場合を除いて冬季間貯蔵するものは、一般に貯蔵期間、貯蔵目的によつて異なるけれども、完全したものよりやや早めに収穫したものが貯蔵力がある。例えばカンランやハクサイなどで完全結球したものは、六～八分結球のものより貯蔵中の裂球や腐敗が多くなる。

収穫方法も、熟度とか、貯蔵の期間によつて変えねばならない。例えばカンランなどで短期間の貯蔵なら根を切断しても良いが、春先まで貯蔵しようとする場合には根をつけたままにする。

いずれの場合でも本貯蔵に入る前一週間くらいは、陰乾である程度の水分を蒸散させた上、一～二回くらい傷んだものをより分けるとか、傷んだ部分を取り除くなどの手入れをすることが大切である。

貯蔵の方法

貯蔵に当たつて大切なことは、野菜の呼吸作用をほとんど停止させるような温度で、しかも凍結のおそれのない温度に保つことで、一般に零度から一～二度くらいが丁度良い温度である。

貯蔵法としては窖貯蔵(ムロ)、露地貯蔵、室内貯蔵の三つの方法がある。窖貯蔵は一般農家に見られる屋外での半地下式の窖(ムロ)とか、屋内の床下などに設けられてあるものなどあるが、取出しに便利なため

に多くの野菜が雑居しやすく、とかく湿度が高くなつて長期の貯蔵に適しない場合が多く、施設の点で大量の貯蔵は行なえない。露地貯蔵は圃場に溝を掘り、溝に並べて貯蔵するとか、山積みして稗ものを覆いて防寒する方法で、比較的安全に多量貯蔵することができ、この場合積雪の多少によつて稗ものや覆土を加減する。室内貯蔵は一般家庭で少量の貯蔵に行なわれているように、ハクサイ、カンランを一個ずつ新聞紙でつつむとか、小箱に砂を入れ、これに根菜を埋めて、押入れや、土間の凍らない場所に置く方法である。

野菜の種類によつて貯蔵の難易があり、ダイコン、ハクサイ、ホウレンソウなどは難しいものである。次に種類別の簡単な貯蔵法を述べると、

ゴボウは束にして土に埋めて置いて良く、ニンジン、カブは山積みにして稗ものをかけ覆土して置くだけで十分春先まで保つことができる。カンランは二月頃までに掘り出すものは、根を切つて二～三段積みとして、稗ものをかけて薄く土を覆つて置く、この場合、乾いたモミガラがあれば中にはさむようにすると比較的長く貯蔵できる。春先まで貯蔵するには先にも述べたように完全結球しないものを幅六〇～九〇センチの深さ三〇センチの溝に、外葉を三割くらい残して密に植込むようにして置くが良い。頭には何もかけない方がよい。ハクサイもこの方法で貯蔵できるが、傷みやすいものであるから、むしろ倒立して土を一〇センチくらい覆う。しかし結球の進んでいるものは雪どけ前に掘り上げるのが無難である。

ネギやホウレンソウは短期間なら四五センチの溝を掘り、その中に束を並べ葉身の半分くらいまで土を覆つて置いて良いが、葉身が早く傷むからホウレンソウでは凍結させて納屋の土間に置くとか、ムロに貯蔵する。白根の長い一年葱は乾燥して納屋の棚に上げて置けば春先になつても利用することができる。

ダイコンの貯蔵は割合葉にできるが、貯蔵中に鬆が入りやすく、しかも低温で萌芽しやすいものである。鬆入りは品種によつて差があり、小さいものすなわち熟度の進まないものが入り難いので長期貯蔵には小型のものをを用いる。まず生長点を切り取つて、幅三〇センチの溝に横に並べて乾いた土をはさみ積上げるか、倒立して土をはさみで並べないようにして稗モノをかけて覆土する。その際根との間に空間をあけて空気抜きをつけるとなお良い。

圃場の跡片付け

特に果菜類の圃場の跡片付けはすましておられるだろうか。今年は割合病虫害の多い年であつたからそれだけ丁寧に行なうべきである。果菜の稗は引抜いて集め、乾燥して焼却するのが良い。この場合葉なども集めるようにし、トマトなどの未熟果も集めて処分する。

畑の整理が終つたなら早めに秋耕しにかかる。堆肥の準備があれば明年の作付けを考えて鋤込み、できれば十字科作物の跡などは石灰を散布することなども大切な作業である。(なかはら)



十月は九月に引続いてりんご、なし、ぶどうなど、晩生種に属する重要品種の収穫の月である。

果実の着色と管理上の注意

先月は果実収穫時の注意事項や、除袋について述べたのであるが、ここで果実の着色と樹勢あるいは管理との関係について少し詳しく述べて見たいと思う。

りんごなどの着色種においては、着色の良否が著しく市場価を左右する。わが国は特に果実の大衆化がまだまだ諸外国に比べて遅れており、観念的にも嗜好品的な考え方が強いので、外観的にも着色状態が商品としての評価に大きな影響を及ぼす。

りんご、ぶどうなどの色の本体は「花青素」と呼ばれている物質で、このものでき方の多少によつて、着色に濃淡を生じ、また着色の悪い果実は品質的に見ても決して良好なものではない。

この花青素の発現を支配する条件にはつぎのようなものがある。

(1) 一果当たりの葉数を多くして、果実中の糖分含量を高めること

花青素は葉中にある程度糖分が蓄積されないと形成されない。従つて窒素が効き過ぎ、いつまでも枝の伸長が止まらなかつたり(つきつきと新梢の伸びるうちは葉に糖分の蓄積が起らない)タニ、ハマキ類、キンモン、またはギンモンホソガ、ヨコバインなどによつて葉が害され、あるいは病氣

で葉がおかされたりすると、葉の炭素同化能力(葉が澱粉や糖分をつくる能力)が低下し、果実の着色は不良になる。これらのことを考えると、収穫期が近づいたからといって由断することなく、病虫害の防除を適切に行なわねばならぬ。

またならせ過ぎて一果当たりの葉の枚数が減じたり、土壌が乾いて樹が旱害を受けたりする場合も着色が悪くなる。従つて自園の樹を見回つて着色の不良なものがあれば、その原因をよくつきとめて、管理の不備を補なうように心がけるべきである。すなわち、枝の伸長が良過ぎる場合は、窒素肥料の量、あるいは施す時期などを十分検討してみる必要がある。また剪定が強過ぎるような場合も、りんご、ぶどうなど枝の伸びが遅くまで続いて閉口するものであるから、十分考慮する必要がある。

(2) 果実をできるだけ光線によく当てる
いくら糖分が貯蔵されても、日光に当たらないと着色しない。従つて主枝の背部から出ている徒長枝などは忘れずに除去して、光線の照射を良好にしなければならぬ。枝の混み過ぎた密植園では、いくら葉面積が多くなつても日当たりが悪く、着色に苦勞することになるので、このような園では適宜間伐を断行するように心がけねばならぬ。

(3) 気候条件と着色
着色は気温あるいは土壌中の湿度によつても左右される。一般に夜間の気温が低下すると着色は良好になる。勿論限度以下に気温が下がると却つて着色が不良になるの

で、寒冷地になるにつれて極晩生品種の作付は避けねばならない。りんごの品種中旭は暖地で作るとその着色に苦勞する。しかし本道では八月末から九月にかけて、夜間の気温が十五度C以下に降るので極めて良好な着色を呈する。このように栽培時の品種の選択にも気をくばつて、その土地の気候に適した品種を選ぶことが極めて大切である。

また土壌中の水分が多過ぎると新梢の伸びが止まらず、それにつれて糖分の蓄積が不足がちになり、果実の着色、品質共に悪くなるのが一般の傾向である。特にぶどうは収穫期に近づいてからの過湿を忌むが、りんご、なしなどにおいてもその傾向に変わりはない。従つてかような土地では果樹園に排水の設備をすると同時に、草生栽培を取り入れて、秋口からは草をある程度伸ばし、余剰水分の調節をはかることが望ましい。

人工着色について

着色不十分な果実を、人工的に光線に当てて着色させることを人工着色といつていゝ。本来は、当然樹の上で十分着色させた後収穫するのが本筋であり、人工着色をする商品として日持ちが悪くなり、あるいは色が冴えないなどの不利があるから原則的には行なうべきではない。しかしながら、台風または除袋、枝吊りなど管理作業中の落果実、特別日陰の枝に着いた着色不十分な果実に、止むを得ず行なうのを建前とすべきである。

つぎに実施に当たつての注意事項を簡単に述べよう。

1 人工着色を行なう場所は一樣に光線に当てる意味で、よく日の当たる場所で行なう場合も、光線の強く当たる部分には日焼けを防ぐために日覆をしなければならぬ。

2 地面に並べたものでは着色に「ムラ」ができるので、地上三〇センチくらいの高さに「スノコ板」の棚を造り、下方からの散光をも利用するのがよい。かように地面から離すと夜間はよく果実が冷えて着色に好都合である。

3 日焼けを防ぐための日覆は、棚上三〇〜四〇センチのところに框組して薄い「コモ」または「ヨシズ」などを用いて被覆する。勿論朝夕の光線の弱い時刻は覆をとつて直射光線に当てる。

4 日中、二回くらい如雨露で冷水を散布して、果実の湿度を下げると、着色がよく、さらに果実自体の乾燥を防ぐに役立つ。

5 果実を並べるとき、できるだけ果実同士が接触しないようにすることが望ましい。これは接着部の着色が不良になるからである。また逆に並べると、樹の上での逆実と同じ結果になるので注意しなければならぬ。

6 処理期間は、長いほど貯蔵力を減ずるので、最少限度に止めるべきである。